

# 『源氏物語』「少女」巻・夕霧の呼称と恋

——雲居雁につづく〈脚〉と五節舞姫を見る〈眼〉——

佐藤 瞳

## はじめに

『源氏物語』の主人公・光源氏が栄華を極める過程において、息子の夕霧は誕生し、成長する。超越者の〈子〉という属性を持ちながらも、「視点人物」や「行為者でない」ことが問題とされ、特異なあり方を様々に論じられてきた。<sup>①</sup>

夕霧の特徴的な本質の一つに〈歩く〉ことがある。「野分」巻に顕著に見られるように、夕霧は歩くことによって六条院の女君たちを垣間見、光源氏世界を評する。光源氏世界を垣間見ることは、光源氏を相対化する行為と言える。夕霧は育った三条宮から六条院を往復し、〈歩く〉ことで光源氏世界を相対化しているのである。<sup>②</sup>ところが「野分」巻で顕著に見られる夕霧の〈歩き、見て、評する〉あり方は、夕霧の始発である「少女」巻においては、殆ど示されない。というよりも、夕霧の物語の主軸である雲居雁との恋においては見られない。むしろ雲居雁との恋においては夕霧の〈歩く〉ことが抑制され、五節舞姫との恋において

こそ夕霧の〈脚〉が呼びさまされているのではないか。

夕霧の五節舞姫との恋については、早くに高橋亨氏が「紫上と夕霧との密通の可能性」を暗示するものとして言及している。<sup>③</sup>

「少女」巻の場面を論じるものとしては塚原明弘氏が帝へのタブーを犯す危険性に言及しつつも、夕霧の非・主人公性について論じている。<sup>④</sup>夕霧の恋について、雲居雁との関係が重視されるのは当然のことだが、同時に「野分」巻の夕霧が〈歩き、見る〉ことにつながる「少女」巻の五節舞姫との恋を、改めて見ていく必要がある。

夕霧は「まめ人」として規定されているように見られているが、夕霧が「まめ人」の語で評されるのは物語が「真木柱」巻にまで進んでからである。「真木柱」巻の例を初出として、「まめ人」と評されるのは四例にとどまる。「少女」巻の時点では語り手が「まめやか」な人柄だと夕霧を方向づけるものの、夕霧の言動や心内表現を辿ると光源氏への反発や抑圧された状況から脱したいとする欲求が見られ、夕霧が本質的には「まめ」だけで規定

できる人物とは言えない。「少女」巻は夕霧が単なる「まめ」とどまらない、夕霧の始発の物語として、注目されよう<sup>⑥</sup>。

その始発の物語である「少女」巻では、雲居雁との恋と五節舞姫との恋という二つの恋物語が示される。これまでは筒井筒の幼な恋である雲居雁との恋に対し、五節舞姫は吉野山神女説話をはじめとする神事性との関わりについて論じられてきたが、雲居雁と五節舞姫という二つの恋が続けて語られるなかで、その機能的差異にも注目すべきなのではないか。

本論では、雲居雁との恋では抑制された夕霧の〈脚〉が、五節舞姫との恋においてこそ呼びさまされていることを論じる。〈脚〉という夕霧の本質を論じるにあたり、まず夕霧を規定する呼称について検討し、夕霧がどのように呼ばれるのかを見ることで夕霧のあり方を再考する。その上で、夕霧の呼称と夕霧の行動から、五節舞姫との恋においてあらわれた夕霧の本質について考える。

### 一、呼称の揺らぎ―「冠者の君」と「大学の君」―

美しい「若君」として生まれた夕霧は（葵巻②四三頁）、「若君」（須磨巻②一六四頁）、「大殿の若君」（須磨巻②一九三頁）、「大殿腹の若君」（濡標巻②二八四頁、三〇四頁）などと称され、「うつくし」さの際立つ存在として形容される。「濡標」巻で童殿上したことが示されるものの、目立った活躍は描かれない。

「大殿の若君」という呼称については、笹川勲氏が「大殿腹の若君」の類例とともに、夕霧が母方に属することを強調する呼称として注目し、光源氏と夕霧の父子関係における情の希薄さを論

じている<sup>⑧</sup>。笹川氏も言及するように、「大殿腹の若君」は「少女」巻にも見られ（後述の例①）、母方の系譜を強調する呼称である。笹川論は「大殿の若君」と呼称される存在から「大学の君」という呼称に認識が変わることについて述べるものである。一方で、「少女」巻では「冠者の君」という呼称の用例が最も多い。夕霧のあり方を考える際に「冠者の君」という呼称を検討する必要があるだろう。「冠者の君」を含め、「少女」巻の夕霧を表す呼称を改めて見ていく必要がある。

「少女」巻において夕霧を指し示す呼称として六種類、二十例を次に示す。注目されるのは「冠者の君」と「大学の君」である。以下、二十の例を①～②⑩として示し、通覧する（傍線や丸カッコは私による）。

#### ①「大殿腹の若君」

大殿腹の若君の御元服のことと思しいそぐを、二条院にてと思せど、大宮のいとゆかしげに思したるもことわりに心苦しければ、なほやがてかの殿にてせさせたまつりたまふ。（少女巻③二〇頁）

#### ②「冠者の君」

大学に参りたまふ日は、（中略）またなくもてかしづかれ、つくろはれ入りたまへる冠者の君の御さま、げにかかるまじらひにはたへずあてにうつくしげなり。（少女巻③二九～三〇頁）

#### ③「冠者の君」

冠者の君、ひとつにて生ひ出でたまひしかど、おのおの十にあまりたまひて後は、御方異にて、「睦ましき人なれど、男子にはうちとくまじきものなり」と父大臣聞こえたまひて、け遠くなりたるを、幼心地に思ふことなきにしもあらねば、…（少女卷③三二―三三頁）

④「冠者の君」

秋風樂に掻き合はせて、唱歌したまへる声いとおもしろければ、みなさまさま、大臣をもいとうつくしと思ひきこえたまふに、いとど添へむとにやあらむ、冠者の君参りたまへり。「こなたに」とて、御几帳隔てて入れたてまつりたまへり。（少女卷③三七頁）

⑤「冠者の君」

（女房）「殿は今こそ出でさせたまひけれ。いづれの隈におはしましつらん。今さへかかるあだけこそ」と言ひあへり。ささめき言の人々は、「いとかうばしき香のうちそよめき出でつるは、冠者の君のおはしつるとこそ思ひつれ。あなむくつけや。後言やほの聞こしめしつらん。わづらはしき御心を」とわびあへり。（少女卷③三九―四〇頁）

⑥「男君」

宮はいいと思す中にも、男君の御かなしさはすぐれたまふにやあらん、かかる心のありけるも、うつくしう思さるるに、…（少女卷③四六頁）

⑦「冠者の君」

かく騒がるらんとも知らで、冠者の君参りたまへり。一夜

も人目しげうて、思ふことをもえ聞こえずなりにしかば、常よりもあはれにおぼえたまひければ、夕つ方おはしたるなるべし。（少女卷③四七頁）

⑧「男君」

おとなびたる人や、さるべき隙をも作り出づらむ、男君も、いますこしものはかなき年のほどにて、ただいと口惜しとのみ思ふ。（少女卷③五〇頁）

⑨「冠者の君」

をりしも冠者の君参りたまへり。もしいささかの隙もやと、このごろはしげうほのめきたまふなりけり。（少女卷③五二頁）

⑩「男君」

男君の御乳母、宰相の君出で来て、…（少女卷③五五頁）

⑪「冠者の君」

（宰相の君）「いでや、ものげなしと侮りきこえさせたまふにはべるめりかし。さりとて、げに、わが君人に劣りきこえさせたまふと聞こしめしあはせよ」と、なま心やましきままに言ふ。冠者の君、物の後ろに入りゐて見たまふに、人の咎めむも、よろしき時こそ苦しかりけれ、いと心細くて、涙おし拭ひつつおはするけしきを、…（少女卷③五五頁）

⑫「男君」

（乳母）「…もののはじめの六位宿世よ」とつぶやくもほの聞こゆ。…男君、我をば位なしとてはしたなむるなりけり

と思すに、世の中恨めしければ、  
 ……（少女巻③五七頁）

くれなゐの涙にふかき袖の色をあさみどりにや言ひし  
をるべき

⑭「大学の君」

⑮「冠者の君」

（源氏）をとめごも神さびぬらし天つ袖ふるき世の友  
よはひ経ぬれば

(中略) 冠者の君も、人の目とまるにつけても、人知れず思ひ歩きたまへど、あたり近くに寄せず、いとけけしうもてなしたれば、ものつつましきほどの心には嘆かしうてやみぬ。(少女巻③六三―六四頁・源氏と五節の贈答の後

⑬ 冠者の君

（惟光）「なぞの文ぞ」とて取るに、（中略）兄弟逃げていくを、呼び寄せて、（惟光）「誰がぞ」と問へば、（兄弟）「殿の冠者の君のしかじかのたまうてたまへる」と言へば、

(少女卷③六六頁)

今日はわざとの文人も召さず、ただその才かしこしと聞こ  
えたる学生十人を召す。武部の省の試みの題をなすらへ  
て、御題賜ふ。大殿の太郎君の試み賜りたまふべきゆゑな  
めり。(少女卷③七一頁)

⑬ 冠者の君

繋がぬ舟に乗りて池に離れ出でて、いと術なげなり。(中略) 山風の響きおもしろく吹きあはせたるに、冠者の君は、かう苦しき道ならでもまじらひ遊びぬべきものをと世の中恨めしうおぼえたまひけり。(少女卷③七二頁)

⑬「大学の君」

かくて大学の君、その日の文うつくしう作りたまひて、進士になりたまひぬ。(少女巻③七六頁)

②〇「侍従の君」

いま一方の御気色も、をさをさ落としたまでは、侍従の君  
添ひて、そなたはもてかしづきたまへば、げにかうもある  
べきことなりけりと見えたり。（少女巻③八〇頁・花散里  
が六条院に移る部分）

夕霧を示す呼称を整理すると、

①「大殿腹の若君」↓②⑤「冠者の君」↓⑥「男君」↓⑦  
 「冠者の君」↓⑧「男君」↓⑨「冠者の君」↓⑩「男君」↓  
 ⑪「冠者の君」↓⑫⑬「男君」↓⑭「大学の君」↓⑮

⑬・⑭「冠者の君」(間に⑰「大殿の太郎君」)↓⑲「大学の君」↓⑳「侍従の君」

という変遷をみることができる。大まかに見ると②～⑤、⑦・⑨・⑪の「冠者の君」、⑥・⑧・⑩・⑫～⑬「男君」、続いて⑭「大学の君」と称され、再び⑮～⑯「冠者の君」と称された後に⑰「大学の君」と呼ばれている。注目すべきは、幾度も「冠者の君」と呼ばれるものの、その間に「男君」「大学の君」の称があり、呼称が揺らいでいることである。「冠者の君」十例と「大学の君」二例はどちらも「少女」巻にのみ見られる呼称であり、夕霧を象徴する呼称と言えるだろう。夕霧を規定するこれらの呼称を検討していく。

「冠者の君」「大学の君」を検討するにあたり、まず①「大殿腹の若君」に注目すると、「大殿腹の若君」は「少女」巻以前から用いられている呼称であり、母方の系譜を強調するものである。元服の儀は三条宮で行われ、夕霧と母方の繋がりが強調される。光源氏は当初二条院で考えるが、大宮が見たいという理由が語られ、夕霧はそれまで通りの生活基盤のまま「元服」という通過儀礼を迎えることとなる<sup>⑩</sup>。また、母方で元服の儀が行われることが史実からみると異例であることは、服藤早苗氏が「成人としての元服儀礼においては、父方親族の関与が強かった」「祖父や父方伯父などの邸宅空間が儀式の場とされた」と述べている<sup>⑪</sup>。ただし、夕霧にとって父方の祖父は桐壺帝であるし、光源氏と同腹の兄弟はいないため、物語の状況と史実とを一概に論じることではない。いずれにせよ、元服すなわち「冠者」となる儀は、母方

との結びつきが強調されているのである。

一方で、字をつける儀式は二条東院で行っている。二条東院は光源氏の邸宅ではあるが、光源氏の基盤である二条院ではなく、字つけの儀が二条東院で行われたことは、夕霧と光源氏の繋がりを必ずしも強調しているとは言えないだろう。字つけ、すなわち「大学」に関わる儀においては、夕霧が母方と切り離されつつ、父方に帰属したとまでは言い切れないことに注目すべきである。

②～⑤、⑦・⑨・⑪において「冠者の君」の例が続く。「冠者」(かざ、かんざ、かじゃ)という語は、平安朝漢文日記においては天曆二年四月一八日の「貞信公記」の記事「宅門之間、颺風大起、前駟之中、有落馬脱冠者云云」をはじめとして、天元五年二月一七日の『小右記』に「五日所承之綸旨、被奏云々、案内裏式、加冠者伝之可奉仕、理髮者納言可奉仕也」など、一般名詞としての用例が多く見られるが、いずれも「冠者の君」のような人物呼称としては見られない<sup>⑫</sup>。

物語において「冠者」は「源氏物語」が最古例で、「桐壺」巻に光源氏の元服の際に「冠者の御座、引入れの大臣の御座の御前にあり」の例がある(桐壺巻①四五頁)。ここでの例は光源氏を指すものの、単に元服した者を指す一般名詞としての用法である。「少女」巻の「冠者の君」のように何度も特定の人物を指す呼称として機能しているものではない。光源氏の「冠者」はこの一例のみで、「少女」巻までこの語は用いられることがない。光源氏が「光る君」や「源氏の君」という特有の呼称により特異な者・超越者として語られるのに対し、夕霧を象徴する「冠者の

君」は、成人したのにもかかわらず何者にもなれていないことを刻印する呼称であると言える。光源氏の息子でありながら微官のまま、元服しただけの「冠者」のままで居続けることが異例なのであるから、夕霧が繰り返し「冠者の君」と呼ばれることは、本来持つていたかもしれない夕霧の潜在的な超越性を無化し、奪っていく要因となっているのではないか。周囲の者に「冠者」として呼ばれ続け認知されることで、「冠者」の刻印を押され続けるという環境因子こそが、夕霧の力を削ぎ、素質を押し込めていくのだと言えるだろう。

「冠者」の比較的古い例として、『今昔物語集』に、  
其ノ後、年月ヲ経ル程ニ、此ノ被不孝タル兎漸ク勢長ジテ、  
元服ナドシテ世ノ中ニ有ケレドモ、(中略) 其ノ冠者可然キ  
所ニ宮仕ヘシケル程ニ盗ラシテケリ。(二九卷一話)  
とある。「桐壺」巻の例と同じく元服したばかりの若者を指す語として用いられている。

少し時代が下るが『十訓抄』では、

匡房卿、いまだ無官にて、江冠者とてありけるを、(一ノ二  
十一)

とあり、「冠者」が「いまだ無官」であることが強調されている。ここでの「冠者」は成人したにもかかわらず無官であることにより、貴族社会の身分秩序に組み入れられていない存在である。「冠者の君」と繰り返し呼ばれる夕霧は、六位で昇殿を許されないことにより、上流貴族社会の秩序の枠内にまだ参入しておらず、序列の最底辺に位置づけられる。「冠者の君」と称される夕霧には

そのような抑圧された意味あいが付与されているのである。<sup>⑮</sup>

②の「冠者の君」の例では「大学に参りたまふ日」の夕霧の様子が「かしづかれ」「つくろはれ」とある。周囲の人々によってつくりたてられ、祭り上げられている。ことにふれて「あてにうつくしげ」と讃美されるのと裏腹に、夕霧自身は序列の最底辺に位置づけられる身である。秀でた外見や血統に対して「冠者」すなわち最底辺の者であることは釣り合わず、夕霧は順当に昇進できなかったことで、ある種の抑圧を被っている。夕霧が繰り返し「冠者の君」と呼ばれ続けること、昇殿を許されないことは、夕霧が上流貴族社会に参入することが許されない抑圧された身であることを強調する。「冠者の君」という称は夕霧の抑圧を象徴するもののなのである。

③の「冠者の君」は、夕霧が元服してしまったことで雲居雁とは「け遠く」あらねばならないという夕霧のままならなさを示す例である。「幼心地に思ふことなきにしもあらねば」という夕霧の心内が示され、以降、恋の不如意が語られていくこととなる。雲居雁との恋における夕霧のあり方は後に詳述するが、「冠者の君」呼称のもと、恋においても夕霧は抑圧されていくこととなる。

④⑤⑦⑨の「冠者の君」は雲居雁に逢いたがために夕霧が三条宮を頻繁に訪れているが、逢うことのできない状況において用いられる例である(⑤は女房が内大臣の来訪に気付かず、夕霧と勘違いしたことを話す例である)。夕霧は雲居雁に逢うことはおろか、見ることもできない。これは⑪の例においても同じことが



言える。

⑪は雲居雁を見たいために夕霧が「物の後ろ」にいるのだが、見ることも逢うこともできない。この後、大宮のはからいでついに雲居雁と逢うことができる。夕霧は雲居雁を自分の力では見ようとしても見られない。近づくこともできないのである。後に「野分」巻で様々な女君を〈見る〉夕霧の眼は、ここでは全く機能していない（このことについては後で述べる）。

大宮のはからいによって雲居雁と逢えたことで、夕霧は⑫⑬「男君」と呼ばれ、恋の主体として呼ばれることになる。夕霧はようやく「冠者の君」呼称から解放されたかに見える。しかし恋の場面においても「六位宿世」と侮られ、「冠者」から自由になることはない<sup>⑭</sup>。また、ようやく歌を詠み交わしたものの、雲居雁が返歌を詠み終えないうちに、内大臣の迎えによって二人は離れなければならなくなる。雲居雁が内大臣のもとに去った後、夕霧は「臥す」ことしかできない。夕霧は自らの眼で垣間見ることができないだけでなく、逢ってもすぐに離れなければならず、雲居雁を引き留める術を持たない、極めて無力な「男君」なのである。

麻生裕貴氏は夕霧と雲居雁の「男君」「女君」呼称が恋物語を幼い主人公として位置付けるために用いていると論じている。二人の恋はその「幼さがあって初めて成り立つもの」とする。⑫⑬の例について考えると、成人した「男」でありながらも「幼さ」、無力さが強調されるものとして、夕霧の「男君」呼称は機能していると言えるだろう。

雲居雁との仲を引き裂かれた後に夕霧は⑭「大学の君」と呼ばれることとなる。恋の物思いから胸が塞がり何も手につかず、「書も読」むことができない。ここで何度も用いられた「冠者の君」ではなく「大学の君」と呼ばれることとなる。「大学の君」なのに勉強もできないという皮肉を込めた称で呼ばれているのである。呼称と現実に齟齬があり、何も出来ないという無力極まるこの部分において、夕霧は「紛れ歩」く。

「大学」という場は光源氏の教育観に基づき、光源氏の理想とする聖代の実現に関わるものであるが、字つけの儀式の戯画化された博士たちのあり方をはじめとして、貴族社会の価値観にとられない場であると言える。「冠者の君」という呼称は母方で執り行われた元服のイメージを揺曳しつつ、身分社会の序列における最底辺に置かれたことを示すものであった。そのような無力な夕霧のあり方と異なり、「大学の君」は身分社会の序列の枠内には位置づけられない呼称と言える。「大学の君」と呼ばれることで母方との繋がりは切り離され、単に無力なあり方ではなくなっている。

「紛れ歩く」という語は目的もなく闇雲に歩き回ることを意味する。「冠者の君」と呼ばれていたときには夕霧は雲居雁を求めて三条宮に何度も「参り」、訪問するのであるが（④⑤⑦⑨の例）、その脚は目的を果たすべく機能していたとは言えない。夕霧の来訪は「歩く」という語で語られることはなく、垣間見ることとも逢うことも出来なかった。あれだけ幾度となく呼ばれていた「冠者の君」という呼称が揺らぎ、新たに「大学の君」と呼ばれ

たときこそ、夕霧の〈脚〉は無秩序に「歩く」ものとして動き始めるのである。そしてその歩みによってこそ、五節舞姫を垣間見ることとなる（第三章において検討する）。

雲居雁との恋と五節舞姫垣間見場面を検討する前に、⑮～⑳の例を概観しておきたい。⑮では夕霧が五節舞姫を垣間見た後、再び「冠者の君」と呼ばれている。光源氏と五節の君との贈答が示された後に⑮の部分があり、夕霧の五節舞姫との恋が光源氏のそれと対比されている。ここで夕霧が再び「冠者の君」と呼ばれていることは、光源氏の恋と対比的に夕霧の五節舞姫との恋が示されることを考え合わせると、夕霧の幼さを強調するものとして「冠者の君」呼称が選ばれているとも考えられる。ただし夕霧は「冠者の君」と呼ばれていても、「思ひ歩」くという〈脚〉が示されている。「大学の君」呼称と五節舞姫垣間見を経て、夕霧の〈脚〉は機能している。しかしその内実は「あたり近くだに寄せず、いとけけしうもてなしたれば」というもので、〈脚〉が再び五節舞姫を見ることも逢うことにも繋がっていない。再び「冠者の君」と呼ばれた夕霧は、再び無力となっているのである（しかし〈脚〉が示されることの意義は大きい。第三章において詳述する）。

⑯の「冠者の君」は夕霧が五節舞姫に贈った手紙について惟光に問いつめられた五節舞姫の兄弟が、手紙の主は夕霧だと明かす発語部分の例である。咎められることを恐れた兄弟が惟光を意識して「殿の冠者の君」と言い、夕霧の父・光源氏を強調している。「冠者の君」の呼称自体は②・⑤・⑦・⑨・⑪の例において

は元服の儀との関連から母方との繋がりの強さを暗示する呼称であったが、⑯は母方を暗示する意味あいは無くなっている。「殿の」とあえて父方を強調するものとして用いられることで、他の「冠者の君」用例とは異なる例と言える。

⑮・⑯・⑱において「冠者の君」と示され、その間に一度⑰「大殿の太郎君」とある。⑰と⑱は朱雀院に行幸し、放島の試みが行われる際の例である。朱雀院行幸において光源氏の長男、すなわち「大殿の太郎君」のための場が設けられたことが示される。ここでの「大殿」はこの前に「大殿は御歩きしなければ」ともあり（少女巻③七〇頁）、光源氏を指すものとして用いられている。先に示した⑯では「殿の冠者の君」という言い方をするこゝとで私的空間において父・光源氏との繋がりが強調されていたが、⑰「大殿の太郎君」は並みいる人々を前に朱雀院行幸という準公的な場、社会的な空間において光源氏との繋がりが再確認される。このように、光源氏との繋がりが再認識される時に、⑱「冠者の君」の例が再び示される。

⑱の例において繋がぬ舟に乗せられ、「かう苦しき道ならでも」と世の中を恨む夕霧は、<sup>20</sup>「冠者の君」という呼称に胚胎する抑圧性を体現している。放島の試みとは、夕霧の抑圧性を分かりやすい形で社会的に共有する場と言える。池に浮かべられた夕霧の無力な姿が、行幸に列する人々の眼前で認知されることとなる。貴族社会において夕霧の特異なあり方が十分に再認知されることで、夕霧は「冠者の君」を脱してゆく。すなわち、放島の試みという試練を乗り越えた夕霧は、再び⑲「大学の君」と呼ばれるこ



となる。「進士」にふさわしく「大学の君」の呼称が用いられ、以後夕霧は「冠者」と呼ばれることはない。様々に試練を与えられ、乗り越えた者として夕霧は立ちあがってくる。⑮の「冠者の君」は元服という通過儀礼における試練を象徴する呼称として機能しており、十例ある「冠者の君」呼称の最後の用例である。⑮の「冠者の君」は、抑圧される夕霧を最も象徴的に示しつつ、それを超克することが示されていると言える。

「大学の君」という呼称が二度用いられることについて考えてみたい。⑭において一度「大学の君」という呼称が用いられた後再び「冠者の君」という呼称が用いられているように呼称に揺らぎが見られるのは、元服という通過儀礼の中で試練を与えられ、夕霧自身のあり方が揺らいでいるからに他ならないだろう。⑭の「大学の君」では、「大学の君」と呼ばれるのに「大学」を象徴する「書」は読むことができず、代わりに「歩」くこととなっていた。⑯の「大学の君」では「大学」の名にふさわしく「文」を立派に作り、進士に及第する。⑭では「大学の君」であることを全うすることができずにいたので、夕霧は「大学の君」からも「冠者の君」からも脱することが出来ない。しかし⑯では「大学の君」として立派に名を体現し、周囲の期待に応えることで務めを果たすので、この称から脱することができたと考えられる。また、「冠者の君」の例では無力さが際立っていたのに対して、「大学の君」の例では歩いたり(⑭)、文を作ったり(⑯)という、夕霧の行動原理が実現されている。十例の「冠者の君」に対して二例の「大学の君」であるが、夕霧の本質において重要な局面で

用いられるのが「大学の君」呼称だと言える。だからこそ「大学の君」(⑯)と呼ばれたことを経て、夕霧は⑳「侍従の君」と呼ばれることとなる。

「冠者」も「大学」も職掌を示す呼称ではなく、一般的な男性官人の呼称とは異なるものであったが、「侍従の君」は夕霧をようやく宮廷貴族社会の枠組みの中に位置づけた呼称となっている。夕霧が侍従となった詳しいいきさつは省筆されているものの、「冠者」と呼ばれる夕霧の局面は終焉を迎えた。「侍従の君」はこの一例のみで、次に夕霧が語られる時には「中将」(玉鬘巻③一二七頁)、「中将の君」(玉鬘巻③一三二頁)とあり、順調に昇進していることが分かる。「冠者の君」での試練を「大学の君」を全うすることで乗り越え、それにより⑳「侍従の君」と呼ばれ、貴族社会の序列に組み入れられたからこそ、順調に「中将」に昇進することが出来たのだと言えるだろう。

以上、「少女」巻における夕霧の呼称を通覧し、「冠者の君」呼称と「大学の君」呼称の揺らぎについて述べてきた。さらに注目すべきは、夕霧が「冠者の君」と呼ばれる時に雲居雁との恋が主に語られ、「大学の君」と呼ばれた後に五節舞姫を垣間見ていることである。二つの恋について第二章・第三章で検討する。

## 二、雲居雁との恋における「冠者の君」の歩めぬ〈脚〉

第一章で挙げた②・⑤、⑦・⑨・⑪の「冠者の君」例において、雲居雁の恋における夕霧の脚は「参りたまへり」等の表現で示されるものの、雲居雁に接近するのではなく、極めて無力化

されたものであると述べた。更に詳しく見てみると、最初は示されていた歩みが、後に夕霧を静止させ、歩くことを抑制していることが分かる。このことについて検討していく。

そもそも元服後の夕霧は二条東院の曹司、すなわち「静かなる所に籠め」られている（少女巻③二七頁）。「つと籠りゐたまひて」等（同頁）、「籠る」ことが繰り返し強調されている。大宮のもとには「一月に三たび」参上することが定められ（同頁）、光源氏により夕霧は行動の制限を受けることとなる。「一月に三たび」が象徴的に示すように、夕霧は規則正しく行動を管理し律することが求められている。また、二条東院での夕霧は「籠る」ことにより「歩く」ことができないが、代わりに「読む」ことが行動原理となつていえると言えらる。

先に雲居雁との恋における夕霧の「脚」は無力化されたものと述べたが、雲居雁との恋の始発部においては、実は夕霧の「脚」は最初は明確に示されている。「冠者の君」例③の部分を見つてみることにする。

冠者の君、ひとつにて生ひ出でたまひしかど、おのおの十にあまりたまひて後は、御方異にて、「睦ましき人なれど、男子にはうちとくまじきものなり」と父大臣聞こえたまひて、け遠くなりたるを、幼心地に思ふことなきにしもあらねば、はかなき花紅葉につけても、雛遊びの追従をも、ねむごろにまつはれ歩きて、心ざしを見えきこえたまへば、（少女巻③三二―三三頁）

雲居雁と交わす夕霧の脚として、「まつはれ歩き」という

語が示される。単に「歩く」のではなく人の後に付き従うという「まつはる」が冠された歩みである。夕霧が雲居雁にいつも付きまといつて歩き、「追従」していることがわかる。この夕霧の歩みは雲居雁が先に動き、夕霧がそれに追従していることを示す表現である。夕霧の最初に示される「脚」は、夕霧が先に立つて動く歩みではなく、あくまでも追従したものに過ぎない。「脚」が、他律的な様相を呈しているのである。<sup>②</sup>

雲居雁との恋の始発において他律的なものとはいえ、夕霧の「脚」は「歩く」ことが示されていた。しかし次の部分で夕霧の「脚」は、静止して動かなくなつていく。前章例⑦の「冠者の君」の後の部分を引用する。

心もそらにて、人しづまるほどに、中障子を引けど、例はこととに鎖し固めなどもせぬを、つと鎖して、人の音もせず。いと心細くおぼえて、障子に寄りかかりてゐたまへるに、女君も目を覚まして、（中略）幼き心地にも、とかく思し乱るるにや、（雲居雁）「雲居の雁もわがごとや」と独りごちたまふけはひ若うらうたげなり。いみじう心もとなければ、（夕霧）「これ開けさせたまへ。小侍従やさぶらふ」とのたまへど、音もせず。（中略）乳母たちなど近く臥してうちみじろくも苦しければ、かたみに音もせず。（中略）宮の御前にかへりて嘆きがちなるも、御目覚めてや聞かせたまふらんとつつましく、みじろき臥したまへり。あいなくもの恥づかしうて、わが御方にとく出でて御文書きたまへれど、小侍従もえ逢ひたまはず、かの御方さまにもえ行かず、胸つぶれておぼえた

まふ。(中略) 御後見ともいみじうあはめきこゆれば、え言も通はしたまはず。(少女卷③四八―四九頁)

内大臣の意向により仲を引き裂かれた夕霧と雲居雁の場面である。二人の幼さが強調される部分であるが、ここでは夕霧の行動が抑制されていくことに注目したい。中障子が閉ざされていることを知った夕霧は障子に「寄りかかり」、雲居雁に接近しうる限りを尽くして静止する。雲居雁が「雲居の雁もわがごとや」と呟いた声が聞こえて、夕霧は必死に声を掛けるが、恥ずかしがる雲居雁は「音もせず」、声はおろか身じろぐこともしない。雲居雁に呼応するように夕霧も「かたみに音もせず」、音を主とした全ての伝達手段を発しなくなる。二人の幼さの表象として「音もせず」というあり方があるのだが、ここで雲居雁の幼い反応は夕霧にも連鎖する。先に発するのは雲居雁の声なのである。雲居雁の独り言が先に呟かれ、それに応じて夕霧は声を上げる。雲居雁が黙ると夕霧も音を立てず、「臥す」ばかりになる。先に述べたように、雲居雁に「まつわれ歩」いて付き纏わる夕霧は、声を上げないあり方においても雲居雁に「へつづく」のである。

その後の夕霧は「小侍徒にもえ逢ひたまはず、かの御方ざまにもえ行かず」、雲居雁も「え言も通はしたまはず」と「え…ず」が繰り返される形で行動の不可能性が強調される。夕霧も雲居雁も行動の全てが抑制され、歩くことはおろか動くことすらできない。このような閉塞的な状況に陥ったことにより、夕霧は行動を変容させていくこととなる。

夕霧は光源氏により三条宮への来訪を「一月に三たびばかり」

(少女卷③二七頁) に制限されており、この規則を守っていたのだが、雲居雁との仲を裂かれた後はこれを破り、「もしいささかの隙もやと、このごろはしげうほのめきたまふなりけり」(少女卷③五二頁)とあるように頻繁に三条宮を訪れている。一見すると〈脚〉が活性化されているかに見えるが、雲居雁と逢うことは叶えられない。〈脚〉が恋の成就や垣間見に結実するものとして機能してはいないのである。頻繁に三条宮を訪れるという夕霧の行動変容は、二条東院や三条宮といった場の問題と深く関わっていると考えられる(第三章においてふれる)。

森野正弘氏は夕霧が大学に入学し、二条東院の曹司に籠ること、それまでいた母方の三条宮から距離を置いたことを「血統からの切断」と捉えている<sup>22)</sup>。一方で二条東院を母方と父方の双方の介入を許す中立的な位相と位置づけ、学問と貴族社会とを媒介する役割を担う夕霧の浮遊性について論じている。森野論では夕霧のそのような浮遊性により他者と異なる風景が見えることから、視点人物としてのあり方に関わることを述べている。夕霧の行動範囲が拡がっているという点に関しては異なる視点からも捉えた。雲居雁との恋においては夕霧の行動範囲の拡がりはいむしろ発揮されず、雲居雁との恋が停滞していることにより行動範囲が拡がっているとも捉えられるだろう。夕霧の行動の拡がりには雲居雁との恋の停滞によるということに注目しておきたい。

内大臣を恐れた夕霧の脚は「隠れ」、わが御方に「入」という部分がある(少女卷③五二頁)。また、夕霧の乳母の宰相の君の様子を夕霧が「物の後ろに入りあて見」という部分がある

（少女卷③五五頁）。夕霧の〈脚〉は隠れるためのものとして機能し、歩むための機会をうかがっているかに見える。しかし、夕霧がその機会をとらえて恋のための歩みを進めることは示されない。むしろ乳母と大宮の計らいにより「夕まぐれの人のまよひに對面せさせたまへり」とあるように（少女卷③五五頁）、助けてもらってはじめて逢うことが実現する。夕霧の〈脚〉により雲居雁を垣間見することもなければ、夕霧の〈脚〉により逢うことが出来たのではない。雲居雁との恋においては、夕霧の〈脚〉は効力を持つものとしては示されない。

夕霧の〈脚〉の動きを整理してみる。雲居雁との恋を語る始発においては、夕霧の〈脚〉は雲居雁に追隨するものとして機能していた。次に雲居雁が「雲居の雁もわがごとや」と呟く場面においても、雲居雁に〈つづく〉ばかりで歩むことはできず、あらゆる行動が不可能に陥っていき、夕霧の〈脚〉が機能していかないことを見た。雲居雁と対面する際には夕霧は自らの〈脚〉で歩くのではなく人に助けてもらって雲居雁に逢う。二人の恋においては垣間見が欠如し、夕霧の〈脚〉による恋の成就是示されない。

恋の発端として垣間見は重要な意味を持ち、〈脚〉の動きが垣間見に不可欠であることは言を俟たない。<sup>23</sup>筒井筒の幼馴染である夕霧と雲居雁には垣間見が欠落しているのは当然のことのようにも思えるが、そのことによって夕霧の〈脚〉の歩みは活性化されず、むしろ抑制されていくのではないか。垣間見において、見る男は歩き、見られる女は座り、男君の動と女君の静が恋の発端として発動する。ここでは動く男君の側に力があるはずである。し

かし夕霧と雲居雁の場合は先に見た通り、夕霧が雲居雁に「まっはれ歩」くことにより、むしろ雲居雁の方が動いている。本来先に動くことによって力を持つはずの夕霧に優位性はなく、夕霧が雲居雁に〈つづく〉ことで、二人の力は同等もしくは雲居雁が優位かもしれないのである。雲居雁の独り言の声が夕霧の言葉を誘発し、雲居雁が音を発しないと夕霧も音を立てなかった。このように、一方の言動がもう一方の言動に作用を及ぼし関係し合う、それが「ひとつにて生ひ出で」た夕霧と雲居雁の連動するあり方なのである（少女卷③三二頁）。雲居雁との恋において夕霧の〈脚〉は、夕霧に優位な力が働くものではなく、夕霧ひとりの力としては無化されたものである。

「冠者の君」という呼称は夕霧の無力さや抑圧性を強調するものであった。雲居雁との恋において夕霧の力が無化されたものとして示されている。これは、夕霧が「冠者の君」という、抑圧性や無力さが強調された呼称で呼ばれていることと深く関わっているからなのだとと言えるだろう。

### 三、五節舞姫に呼びさまされた「大学の君」の〈脚〉と〈眼〉

垣間見の欠如により、互いが互いの言動に作用を及ぼし、関係し合う雲居雁との恋のあり方を見てきた。このようなあり方と大きく異なるのが垣間見によって恋が始まる五節舞姫である。夕霧が五節舞姫と関わる直前から見てみよう。第一章の例⑭「大学の君」とそれに続く垣間見場面である。

大学の君、胸のみふたがりて、ものなども見入れられず、屈

じいたくて、書も読までながめ臥したまへるを、心もや慰むと立ち出でて紛れ歩きたまふ。さま容貌はめでたくをかしげにて、静やかになまめいたまへれば、若き女房などは、いとをかしと見たてまつる。上の御方には、御簾の前にだに、もの近うもてなしたまはず、わが御心ならひ、いかに思すにありけむ、うとうとしければ、御達などもけ遠きを、今日はものの紛れに入り立ちたまへるなめり。舞姫かしづきおろして、妻戸の間に屏風など立てて、かりそめのしつらひなるに、やをら寄りのぞきたまへば、なやましげにて添ひ臥したり。ただかの人の御ほどと見えて、いますこしそびやかに、様体などのことさらび、をかしきところはまさりてさへ見ゆ。暗ければこまかには見えねど、ほどのいとよく思ひ出でらるるさまに、心移るとはなけれど、ただにもあらで、衣の裾を引きならいたまふに、何心もなく、あやしと思ふに、

(夕霧)「あめにますとよをかひめの宮人もわが心ざすしめを忘るな

少女子が袖ふる山のみづがきの」とのたまふぞうちつけなりける。(少女巻③六〇―六二頁)

夕霧の行動原理として、二条東院の曹司に籠って「書ども読」むということがあるが(少女巻③二八頁)、ここで夕霧は、まず読むことも食事をとることも出来ず、「ながめ臥」すしかできないことが示される。雲居雁と連動する夕霧は雲居雁という拠り所がなくは動くことができないかに見える。ところが次に語られるのは夕霧の「立ち出でて紛れ歩」く姿である。夕霧は三条宮で

は手引きの女房をかたらって雲居雁と逢うような手立てを講じることは出来ないが、二条東院に在っては、最初こそ動かないもののすぐに立ち上がり、歩き始める。先述の森野論文にあるように、二条東院という場は夕霧を母方の血統から切り離し、夕霧の行動を拡大させていると考えられる。それに加えて二条東院という場にいることで夕霧は雲居雁との連動から切り離され、解放され、〈歩き〉ことができると考えられる。三条宮という場、そして「冠者の君」呼称は夕霧の行動原理を雲居雁に〈つづく〉ものにさせていた。二条東院という場、そして「大学の君」呼称で呼ばれることによって、夕霧は〈つづく〉あり方から解放され、〈歩き〉始めるのである。

〈歩き〉始めた夕霧は、普段は戒められている「上の御方」すなわち紫の上の居所に容易に近づいてしまう。光源氏の警戒の厳しい場でありながら、「ものの紛れに入り立」つのである。「今日」とあるように、五節の日だからという特殊性がこの場においては重要であろう。つまり、夕霧を侵入させないように禁制されていた「上の御方」において、その侵入を許したのは他ならぬ五節の日、五節舞姫ということになる。もちろん、この日だけの「かりそめのしつらひ」であつたために夕霧が見ることができたということではある。しかし「ものの紛れ」と示される夕霧の侵入は、塚原明弘氏が言及するように、光源氏の「密通に繋がる磁性を既に帯びた」ものである。<sup>25)</sup>「ものの紛れ」に立ち五節舞姫を見る夕霧の〈脚〉は、そのような侵犯性を帯びたものである。



侵入した夕霧は、すぐに五節舞姫を〈見る〉こととなる。「やをら寄りてのぞきたまへば」とあるように、夕霧は五節舞姫を垣間見て、「衣の裾を引きならい」という行動をとる。唐突に歌まで詠み掛けるという素早さである。雲居雁との恋において夕霧は、行動を抑制され、女君に連動することでは動くことができなかった。五節舞姫の前においては夕霧は「歩」き、垣間見、「裾を引き」、歌を詠む。夕霧が垣間見に繋がる〈脚〉を動かし〈歩く〉ことができたのは、二条東院という場だからこそだということとは先に述べた。そこで夕霧の〈眼〉を呼びさましたのは他ならぬ五節舞姫である。五節舞姫を垣間見たことが、夕霧の「裾を引き」、歌を詠むという行動を引き起こしている。雲居雁の前では抑制されていた夕霧の行動は、五節舞姫の前では活性化している。夕霧の行動原理は、夕霧を侵入させ、垣間見させた五節舞姫によつて変容させられているのではないか。夕霧は五節舞姫によつて、潜在的に有していたものの眠っていた〈眼〉を呼びさまされているのである。

垣間見後の夕霧は、五節の日であることにより浅葱以外の直衣の「色聴されて」（少女巻③六二頁）、参内する。好きな衣の色を身に纏うことで夕霧は「冠者」であることから解放されている。「大学の君」呼称で呼ばれることに続いて、衣装においても「冠者」から解放されているのである。そのように抑圧から自由となった夕霧は、「され歩」く（少女巻③六二頁）。五節舞姫を想つて「人知れず思ひ歩」くとあり（少女巻③六三頁）、夕霧の〈歩く〉姿が繰り返し示される。五節舞姫を見たことで夕霧の〈脚〉

は活性化しているのである。しかし夕霧が五節舞姫に再び逢うことは出来ず、五節舞姫の顔立ちが心に焼きついて、「つらき人の慰めにも、見るわざしてんや」と思う心内語が示される（少女巻③六四頁）。夕霧は「つらき人」すなわち雲居雁を想いつつ、雲居雁と逢えない「慰め」として五節舞姫を得たいと思っている。夕霧の心内において五節舞姫を手に入れたと思うあり方は、「野分」巻の紫の上を垣間見た後の心内に同様の心の動きを見ることが出来るだろう。

中将 夜もすがら荒き風の音にも、すずろにものあはれなり。心にかけて恋しと思ふ人の御事はさしおかれて、ありつる御面影の忘れぬを、こはいかにおぼゆる心ぞ、あるまじき思ひもこそ添へ、いと恐ろしきこと、とみづから思ひ紛らはし、異事に思ひ移れど、なほふとおぼえつつ、（中略）人柄のいとまめやかなれば、似げなさを思ひよらねど、さやうならむ人をこそ、同じくは見て明かし暮らさめ、限りあらむ命のほども、いますこしはかならず延びなむかし、と思ひつづける。（野分巻③二六九頁）

紫の上を見たことで惑乱する夕霧の心内であるが、紫の上を「見て明かし暮らさめ」と願望する。雲居雁のことは念頭に置きつつも、紫の上への所有欲は発露し、自戒しつつ思い続けずにはいられない。「少女」巻の五節舞姫垣間見後の夕霧の心内において雲居雁のことは念頭に置きつつ、五節舞姫に対し「見るわざ」を願望する夕霧の心内が見られた。垣間見て、雲居雁と垣間見た女君とを心内に比べつつ、垣間見た女君を得たいと思う夕霧のあり方



が「少女」巻五節舞姫垣間見と「野分」巻紫の上垣間見に共通して見られる。五節舞姫垣間見の場は紫の上の居所であり、光源氏は過去の自身の経験から夕霧を警戒している。高橋亨氏は五節舞姫垣間見が夕霧と紫の上の密通の可能性を暗示するものだと述べる<sup>27</sup>。このように、「少女」巻の五節舞姫垣間見は「野分」巻の垣間見の原点とも言えるものであり、垣間見後の夕霧のあり方においても「野分」巻と持続するものではないだろうか。

雲居雁との恋において行動を抑制することと対照的に、五節舞姫との恋において夕霧の行動が活性化されていることは、手紙をめぐるやりとりにおいても見ることができ。夕霧は五節舞姫の兄弟を通して五節舞姫に手紙を贈る。雲居雁には「かの人は文をだにえやりたまはず」（少女巻③六六頁）とあり、再び「えいず」の可能性が語られ、文を贈ることが出来ない。雲居雁の前では夕霧の願望は抑圧され、伝達を試みることもすらできないのである。一方で五節舞姫に対しては文を贈り、夕霧の想いは本人に伝達されている。雲居雁に対して行動を抑制し、もの言わず動かぬ夕霧は、五節舞姫に対して歩き、見て、文を贈ることで、行為者として立ち上がってくる。

その後の夕霧は、再び二条東院に籠っていることが示されるが、夕霧の世話役となった花散里を「ほのかに見」て批評する（少女巻③六七頁）。つぶさに顔を見ることはできなかったにせよ、花散里の顔立ちを批評し、光源氏の思惑を推し測るなど、後の「視点人物」<sup>28</sup>としての観察眼を発露している。

夕霧が視点人物となることについては、夕霧の母代わりとなる

二人の女性の存在が関与していると考ええる。すなわち、誕生後から長く養育してきた大宮と、「少女」巻で世話役となった花散里である。夕霧は大宮と花散里という二人の母代を持つことにより、複数の帰属する場を持つ。複数の帰属する場と複数の母代が、夕霧に複眼的な視点すなわち観察者としての視点を与えているのではない<sup>29</sup>。花散里は紫の上とともに六条院の衣装をつかさどる役目を持つ女君である。紫の上と同様に、花散里には〈眼〉の力を持つ女君であると考えられる。また、大宮という擬似的な〈母〉に夕霧が育てられたからこそ、「母」でない紫の上を女主人とする光源氏世界を、夕霧は垣間見ることができたのではない<sup>30</sup>。夕霧を「視点人物」にしていくのは複数の〈母〉の存在だと言える。このような夕霧の〈眼〉の始発として、夕霧の〈眼〉を最初に呼びましたのこそ、五節舞姫なのである。

「少女」巻において最後に夕霧が示されるのは新築の六条院に花散里が移ったことを語る部分である。花散里に付き添う夕霧は、「侍従の君」と呼ばれる（少女巻③八〇頁・第一章の例<sup>30</sup>）。夕霧は五節舞姫に〈眼〉を呼びさまされ、二人の〈母〉によって〈眼〉を持つことにより、「冠者」という抑圧を脱したのである。

#### おわりに

夕霧の「冠者の君」呼称と「大学の君」呼称の揺らぎに注目し、雲居雁との恋と五節舞姫との恋における夕霧の〈脚〉を検討してきた。抑圧された「冠者の君」である夕霧が雲居雁との恋においては〈脚〉の動きが抑制され、雲居雁に〈つづく〉ものとし

て夕霧の行動原理が示されていた。「冠者」から自由になった「大学の君」すなわち夕霧は五節舞姫のもとに〈歩き〉、垣間見ることによって〈眼〉が呼びさまされる。「視点人物」として光源氏世界を垣間見ていく夕霧の〈脚〉と〈眼〉の始発となるのが、五節舞姫垣間見なのである。

「冠者の君」や「大学の君」という呼称は夕霧にのみ用いられる特異なものである。「光る君」のような超越性としての呼称で呼ばれない代わりに、夕霧には「冠者」という位相が与えられている。抑圧を象徴する「冠者」であることや三条宮という場、雲居雁に連動し、率先して歩まぬことが、夕霧を形づくっている。夕霧を縛りつけるこれらの場から夕霧が解放されたとき、夕霧は視点人物へと歩み始める。

夕霧を「冠者」に位置づけ試練を与えた光源氏は、そのことで結果的には夕霧に評され、相対化されることとなる。夕霧の特異なあり方は、超越者光源氏に打ち込んでいく楔のように機能していく。そう仕向けたのこそ、他ならぬ光源氏自身なのである。夕霧の〈脚〉と〈眼〉は、光源氏が何者かを改めて問いなおし、批評していくものである。その原点として、「少女」巻の夕霧が立ち上がっているのである。

\*『源氏物語』の本文・巻数・頁数は新編日本古典文学全集に拠り、池田亀鑑編著『源氏物語大成』をもとに一部私に改めた。

注

- (1) 伊藤博「『野分』の後―源氏物語第二部への胎動―」（『源氏物語の原点』明治書院、一九八〇年）、高橋亨「可能態の物語の構造―六条院物語の反世界―」（『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二年）、三谷邦明「野分巻における〈垣間見〉の方法―（見ること）と物語あるいは（見ること）の可能と不可能―」（『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九年）などで論じられている。

- (2) 助川幸逸郎氏は六条院を三つの異質な勢力、すなわち光源氏と秋好中宮と明石一族によって構成される複合体としてとらえ、光源氏の場合を「光源氏世界」とする（『野分巻の季節の〈ずれ〉をめぐる―夕霧のまなざしがとらえなかったもの―』『中古文学論攷』一五、一九九四年十二月）。

- (3) 夕霧が歩いて光源氏世界を垣間見て光源氏を相対化することについて、『源氏物語』「野分」巻の〈野分〉をめぐる―夕霧の〈脚〉と物語の「時間」―において論じた（『湘南文学』四一号、二〇〇七年三月）。

- (4) 注1高橋論文に同じ。

- (5) 塚原明弘「『少女』巻の五節―夕霧のかいま見をめぐる―」（『源氏物語ことばの連環』おうふう、二〇〇四年）。

- (6) 「少女」巻の夕霧と「まめ」について、「まめ」と夕霧―『源氏物語』・「少女」巻という始発―において論じた（『湘南文学』四八号、二〇一四年三月）。

- (7) 新聞一美「五節の舞の起源譚と源氏物語」をとめぐが袖ふる

山」および「五節の舞の神事性と源氏物語」少女巻を中心に――（『平安朝文学と漢詩文』和泉書院、二〇〇三年）。

- (8) 笹川勲「夕霧の呼称と『漢才』」（『源氏物語の漢詩文表現研究』勉誠出版、二〇一七年）。

- (9) 夕霧を指し示す表現として「君」「この君」「人」等もあり、これらを含めて数えると三十六例になる。「君」「人」等は名称ではなく、「冠者の君」や「大学の君」とは性格が異なるため、考察の対象としない。また、「男君」は「冠者の君」のような呼称とは性格を異にするものだが、「冠者の君」の例の間に多く見られるため、取り上げることとする。

- (10) 夕霧に対する大宮の特異なあり方について「『源氏物語』の大宮――『家』を逸脱する眼――」で論じたことがある（『湘南文学』五五号、二〇二〇年三月）。

- (11) 服藤早苗「通過儀礼から見た子どもの帰属――平安中期を中心にして――」（田中真砂子他編『縁組と女性―家と家のはざま―』早稲田大学出版部、一九九四年）。

- (12) 『貞信公記』『小右記』の引用は『大日本古記録』（岩波書店）による。

- (13) 引用は馬淵和夫・国東文磨・稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』

④『小学館、二〇〇二年』による。

- (14) 引用は浅見和彦校注・訳『十訓抄』（小学館、一九九七年）による。

- (15) なお秋澤互氏は、夕霧が当初「四位になしてん」と考えられ（少女巻③二〇頁）、「世人」もそう思ったということが歴史

的観点から見ると不可解であることから、「世人」の認識の作為性について述べている（「四位になしてん」考――『源氏物語』の端役としての「世人」――『源氏物語の准拠と諸相』おうふう、二〇〇七年）。

- (16) 例⑥の「男君」は恋の主体としてのものではなく、大宮の夕霧に対する愛情から「男君」呼称が用いられているため、例⑧・⑩・⑫・⑬とは異なる意味をもつものである。

- (17) なお大井田晴彦氏は「夕霧においては社会的な栄達・官位の昇進が恋の成就と同次元のものとして捉えられている」「夕霧にはかかる傾向がとりわけ顕著」であると指摘している（『夕霧と雲居雁の恋――少女』から『藤裏葉』まで――（鈴木一雄監修・河添房江編『源氏物語の鑑賞と基礎知識』ZOO・梅枝・藤裏葉『至文堂、二〇〇三年』）。また藤原克己氏も夕霧と雲居雁の恋を「はたしてよく言われるように、純愛」と呼び得るものであるうか」とし、夕霧の恋心に疑問を投げかけている（『幼な恋と学問―少女巻―』『源氏物語講座3 光る君の物語』勉誠社、一九九二年）。

- (18) 麻生裕貴「呼称が描く夕霧の恋―男・男君・女・女君―呼称をもとに―」（河添房江編『古代文学の時空』翰林書房、二〇一三年）。

- (19) 夕霧が「紛れ歩く」ことは「須磨」巻にも見える（須磨巻②一六六頁）。歩き回ることが夕霧の本質において重要な意味を持つことを考えると、夕霧が幼時から「紛れ歩く」ことは、潜在的に夕霧が歩き回ることの本質として持っているこ

とが暗示されていると考えられよう。

- (20) 夕霧が学問を修めるにあたって行われる字つけの儀式や放鳥の試みが異例な設定ばかりであることについて、李宇玲氏が論じている（『夕霧の学問―字の儀式から放鳥試へ―』『古代宮廷文学論 中日文化交流史の視点から』勉誠出版、二〇一一年）。

- (21) 「若菜上」巻で夕霧に柏木が〈つづく〉ことを論じたことがある（〈招く〉光源氏・〈つなぐ〉夕霧・〈つづく〉柏木―『源氏物語』『若菜上』巻の垣間見―』『湘南文学』四九号、二〇一四年三月）。単純には言えないが、雲居雁に追従する夕霧が、夕霧に〈つづく〉柏木の脚に何らかの意味で関与している可能性があるという射程を持った、夕霧の恋における〈脚〉のあり方であると考えている。

- (22) 森野正弘「組織化される夕霧の浮遊性」〔『源氏物語の音楽と時間』新典社、二〇一四年）。

- (23) 今井源衛「王朝物語構成上の一手法―かいま見について―」〔『今井源衛著作集 第一巻』笠間書院、二〇〇三年）。

- (24) 注22に同じ。

- (25) 注5に同じ。

- (26) 「少女」巻以前の夕霧はわずかな記述しか見ることができないが、五歳の夕霧が「され走り」（須磨巻②一六四頁）、注19でも述べたが「何心なく紛れ歩きて」（須磨巻②一六六頁）と示される。幼い子供らしい無心な行動であるが、夕霧の行動を語る最初の部分において「歩く」の語が示されているこ

とは注目するべきであるだろう。

- (27) 注1高橋論文に同じ。

- (28) 注1伊藤論文に同じ。

- (29) なお東原伸明氏は、夕霧の生みの母である葵の上が光源氏を「見る」人であり、その「見る」人から夕霧が誕生していることを述べている（『夕霧垣間見・光源氏を「見る」人と親子の物語の論理―「野分」巻の〈語り〉と〈テキスト〉の連関―』『源氏物語の語り・言説・テキスト』おうふう、二〇〇四年）。

- (30) 紫の上の眼の力については「『源氏物語』『野分』巻の垣間見―紫の上の〈眼〉と物語の「感覚」―」で論じた（『物語研究』八号、二〇〇八年三月）。

- (31) このことは「『源氏物語』の大宮―〈家〉を逸脱する眼―」で論じた（注10に同じ）。

（さとう・ひとみ 本学非常勤講師）